

# 聖書ヘブライ語の物語の会話文における kōtal 形の用法について

池田 晶

## 1. はじめに

本稿では、聖書ヘブライ語<sup>1</sup>の会話文における動詞 kōtal 形の用法について論じる。そのためには、聖書ヘブライ語の動詞体系について述べる必要があるので池田潤 (2004) を参照しつつ、動詞体系の説明をすることから始めたい。

聖書ヘブライ語の動詞には、kōtal 形と yīkṭol 形<sup>2</sup>の 2 つがある。伝統的にはそれぞれ過去と未来を表わすとされる。しかし、接続詞のワウ<sup>3</sup>がつくとそれぞれ kōtal 形は未来を表わし (wḵōtal 形)、yīkṭol 形は過去を表す (wayyīkṭol 形)。ワウがつくことによってテンスが変わってしまうので、この現象は「ワウ転換説」と呼ばれる。

<sup>1</sup> ヘブライ語はセム語族北西セム語派カナン語グループに分類される言語である。本稿で扱う聖書ヘブライ語はヘブライ語聖書によって代表される言語を指し、ヘブライ語史のもっとも古い段階に属する。時代的に区別するとヘブライ語は、前 11 世紀から前 2 世紀までが聖書ヘブライ語、前 3 世紀頃から後 4 世紀頃までミシュナ・ヘブライ語、後 19 世紀末まで中世ヘブライ語、そして現代 (イスラエルの) ヘブライ語というように 4 つに区分される。聖書ヘブライ語には、時代に基く下位区分があり、古ヘブライ語、標準聖書ヘブライ語 (または前期聖書ヘブライ語)、そして後期聖書ヘブライ語に分けられる。時代差だけでなく、地域差や媒体差があったことも指摘されている。詳しくは池田潤 (2000a, 2000b, 2002)、池田晶 (2003) を参照のこと。

<sup>2</sup> 池田潤 (2004) では kōtal 形を接尾活用形、yīkṭol 形を接頭活用形と呼んでいるが、本研究ではそれぞれを kōtal 形、yīkṭol 形と呼ぶことにする。池田潤 (*ibid.*) を引用するときも、本論文の中での一貫性を持たせるために kōtal 形、yīkṭol 形と呼ぶことにする。

<sup>3</sup> ワウは等位接続詞 {w} を表記する文字の呼称。{w} には /w/ [wə], /wa/, /wi/, /wo/, /u/ という異形態がある。

しかし、ワウ転換説には例外が多い。また、なぜ接続詞がテンスを転換するのかという問題もある。様々な学説が出されたが<sup>4</sup>、聖書ヘブライ語の動詞組織を2つの形の対立だけで説明づけることはできなかった。しかし、最近の比較セム語学の成果より、聖書ヘブライ語のyiqtol形は歴史的に起源の異なる複数の形式の集合体であることが明らかとなった<sup>5</sup>。

しかし、kotal 形と wkotal 形の関係はどうとらえるべきなのかという問題が残った。アマルナ語<sup>6</sup>を手がかりとしてこの問題に答えたのが池田潤 (*ibid.*) であるが、kotal 形と wkotal 形には本質的には違いがないことが明らかとなった。そして次の3つの提案がなされた。

- 聖書ヘブライ語のkotal 形はTMA<sup>7</sup>に関して無標である。
- kotal 形のTMAは文脈（前の文のTMAと構文、同一文中の副詞）によって決まる。
- 文脈からとくに指定がない場合、kotal 形の動詞の意味に応じてデフォルト値をとる（動作動詞は過去、状態動詞は現在ないし習慣）。

池田潤 (*ibid.*: 88)

池田潤 (*ibid.*) は、Hopper (1979) の前景・背景理論を分析のたたき台の1つとして、物語における kotal 形を「前景」との関わりから論じている。そのため、物語の「背景」とされる会話文は分析の対象とはなっておらず、結

<sup>4</sup> 詳しくは池田潤 (2004: 71-73) を参照のこと。また、ヘブライ語の動詞組織の研究史として、阿部節子 (1985) も挙げておこう。

<sup>5</sup> preterite を表す wayyiqtol 形、jussive を表す yiqtol 形、volitive を表す ?eqilo / niqtlo (volitive は、聖書ヘブライ語では cohortative と呼ばれる 1 人称の意思や願望を表現する形にのみ残っている。詳しくは池田潤 (*ibid.*: 74.fn. 24) を参照のこと。)、imperfect を表す yiqtol 形 (jussive を表す yiqtol 形とは歴史的起源が異なる)、以上の4つがある。詳しくは池田潤 (*ibid.*: 74) を参照のこと。

<sup>6</sup> アッカド語から自立語の多くを借用するが、これにカナン語の接辞をつけ、カナン語の語順に配列する混成言語である。詳しくは、池田潤 (1992) を参照のこと。アッカド語は東セム語派に属する言語で、前24世紀から後1世紀にわたりメソポタミアを中心に用いられた。

<sup>7</sup> TMA: Tense, Mood, Aspect

果的にはいわゆる物語の「地の文」が分析対象となっているといえる。しかし、池田潤 (*ibid.*) の枠組みで説明できない *koṭal* 形の例が会話文で多く見られる。*koṭal* 形を十分に説明するには、池田潤 (*ibid.*) の枠組みに加えて会話文の *koṭal* 形を分析するための枠組みが必要であるといえるのではないだろうか。このような問題意識をもって、会話文の分析を試みてみたい。

## 2. 地の文の分析：池田潤 (2004) より

池田潤 (2004) では上で引用した枠組みを用いて創世記 2:4-8 とサムエル記 1:1-6 が分析例として挙げられている。その結果、池田潤 (*ibid.*) の提案が聖書テキストの共時的分析において有効であることが示された。この池田潤 (*ibid.*) の分析は本論文のたたき台となるものなので詳しく紹介することとする。その中から創世記 2:4-8 の分析例<sup>8</sup>を紹介したい。

### (1) Gen. 2:4

これが天地創造の由来である。主なる神が地と天を造ったとき、

### (2) Gen. 2:5

w+kol	šîḥ	ha+ššode	ṭerem	yihye
&+形sg.m.	名sg.m.	冠+名sg.m.	副	yiktol形3.sg.m.
その全ての	低木	野	まだ～	be動詞相当

<sup>8</sup> 以下の引用では、1段目に原文のローマ字転写、2段目に語形分析、3段目に意味、そして最後に参考訳を付すという方法をとった。聖書ヘブライ語のローマ字転写は、池田・高橋・池田 (2003) の提案する方式に従うが、メテグは省略するし、マケフは「-」で示した。グロスに用いる略号は次のとおり。1=1人称、2=2人称、3=3人称、m=男性、f=女性、sg.=単数、du.=双数、pl.=複数、jus=jussive、前=前置詞、副=副詞、名=名詞、不定=不定形、方=方向、冠=定冠詞、&=ワウ、接=(その他の)接続詞、指代=指示代名詞、人接=人称代名詞、独人代=独立人称代名詞、参考までに、*koṭal* 形は太字で示す。必要に応じて形態素境界は+で示す。

hō+ʔōreš 前+名sg.f. 地上に	w+kōl &+形sg.m. その全ての	ʔéšēb 名sg.m. 草	ha+ššōde 冠+名sg.m. 野	ʔérem 副 まだ～	
yišmōh yiktōl形sg.m. 生える	ki 接 何故なら	loʔ 否定辞 ～ない	himtir kōtal形sg.m. 雨を降らせる	yhwh 固有名 ヤハウエ	
ʔ <sup>e</sup> lohim 名pl.m. 神 <sup>9</sup>	ʔal- 前 ～の上に	hō+ʔōreš 前+名sg.f. 地上に	w+ʔōdom &+名sg.m. 地	ʔāyin 副 ～ない	la+ʔ <sup>a</sup> bōd 前-不定 働く
ʔēt- 前 ～に	hō+ʔ <sup>a</sup> domo 冠+名sg.m. 地				

地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。神ヤハウエが地上に雨を降らせなかった (<sup>kōtal</sup>形) からである。また土を耕す人もいなかった。

## (3) Gen. 2:6

w+ʔēd &+名sg.m. 地下水	yaʔ <sup>a</sup> le yiktōl形3.sg.m. 上がる	min- 前 ～から	hō+ʔōreš 前+名sg.f. 地	w+hišqo &+kōtal形3.sg.m. 潤す
ʔēt- 前 ～に	kol- 形sg.m. 全て	pne- 名pl.m. 表面	hō+ʔ <sup>a</sup> domo 冠+名sg.m. 地	

<sup>9</sup> 一神教であるユダヤ教の神であるヤハウエに言及するとき、「1人の神」にも関わらず「神々(複数形)」を意味する ʔ<sup>e</sup>lohim が用いられる。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した<sup>(kotal)形</sup>。

## (4) Gen. 2:7

wayyiṣer	yhwh	ʔ <sup>e</sup> lohim	ʔet-	hə+ʔoḏom	ʔoḗr
wayyiqtol形3.sg.m.	固有名	名pl.m.	前	冠+名sg.m.	名sg.m.
彼は形成した	ヤハウエ	神	～を	人	塵

min-	hə+ʔ <sup>a</sup> domə	wayyippah	b+ʔappəw
前	冠+名sg.m.	wayyiqtol形3.sg.m.	前+名du.m.+人接3.sg.m.
～から	土	彼は吹き込んだ	彼の鼻に

nišmat	ḥayyim	wayhi	hə+ʔoḏom	l+nēpeš
名sg.f.	名pl.m.	wayyiqtol形3.sg.m.	冠+名sg.m.	前+名sg.f.
息	命の	彼は～になる	その人	生きる者

ḥayyo  
形sg.f.  
生きている

神ヤハウエは、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れた。人はこうして生きる者となった。

## (5) Gen. 2:8

wayyittaʔ	yhwh	ʔ <sup>e</sup> lohim	gan-	b+ʔēden
wayyiqtol形3.sg.m.	固有名	名pl.m.	名sg.m/f	前+固有名
彼は植えた	ヤハウエ	神	園	エデンの

mi+kḳēdem	wayyōsem	šom	ʔet-	hə+ʔoḏom
前+名sg.m.	wayyiqtol形3.sg.m.	副	前	冠+名sg.m.
東の方	彼は置いた	そこに	～を	その人

ʔ <sup>a</sup> šer	yōşor
関係詞	koṭal 形 3.sg.m.
~するところの	彼は作った

神ヤハウエは、東の方のエデンに園を設け、自ら形作った <sup>(koṭal形)</sup> 人をそこに置いた。

(1) の内容から、以下の物語が過去の出来事を表していることが示される。  
 (2) の2つの *yikṭol* 形は共に未完結相を表わすが、テンスに関しては無標である。しかし、(1) から過去性を帯びる。(2) の *koṭal* 形 *himṭir* 「雨を降らせる」は従属節にあるので、主節のテンスと一致するわけではない。*himṭir* は動作動詞なので、テンスはデフォルト値の過去となる。

(3) の *koṭal* 形 *hişko* 「潤す」は接続詞のワウによって *yikṭol* 形 *yaʔ<sup>a</sup>le* 「上がる : 未完結相 : 反復、テンスは文脈から過去」と並列されているので TMA はこの影響を受けて「(地下水が上がってくるたびに何度も) 潤していた」という意味になる。(5) の *koṭal* 形の *yōşor* 「彼は作った」は動作動詞で、関係節中にあるのでデフォルト値の過去となる。

### 3. 会話文の分析例

#### 3.1 分析例1 : 創世記 16:11

(6) Gen. 16:11b

hinn+oḳ	horo	w+yoladt	ben
小辞+人接2.sg.f.	形 sg.f.	&+koṭal形2.sg.f.	名 sg.m.
今 <sup>10</sup>	身ごもっている	貴女は産む	息子

<sup>10</sup> 様々な訳の可能性がある。それについては別稿で論じることとする。

w+ <i>ḵoroʔt</i>	šm+o	yišmoʔeʔ
&+ <i>ḵoʔal</i> 形2.sg.f.	名sg.m. +人接3.sg.m.	固有名
貴女は呼ぶ	彼の名	イシュマエル

「今、貴女は身ごもっている。やがてあなたは男の子を産むだろう <sup>(*ḵoʔal*形)</sup>。彼の名をイシュマエルと呼ぶだろう／呼びなさい <sup>(*ḵoʔal*形)</sup>。

この例文の *ḵoʔal* 形 *wyolaʔt* の「貴女は産む」動詞の後には *ḵoʔal* 形 *wḵoroʔt* 「呼ぶ」が続く。これら2つの *ḵoʔal* 形の TMA 解釈だが、前者は未来の意味、後者は解釈上、命令または未来の両方の可能性を持つと考えられる。

まずは、*ḵoʔal* 形 *wyolaʔt* 「貴女は産む」から考えてみよう。この動詞は「彼女は産むだろう」というように、テンスは未来だと考えるのが妥当だろう。しかし、伝統的な解釈では *ḵoʔal* 形は過去を表すということになっているので、伝統的な枠組みでは適切な解釈が出来ない。「産む」は動作動詞であるということから、池田潤 (2004) の枠組みで考えると、これは過去を表すということになる。しかし、この枠組みでも適切な解釈はできない。

それでは、2つ目の *ḵoʔal* 形 *wḵoroʔt* 「貴女は呼ぶだろう (未来)」または「貴女は呼びなさい (命令)」はどうだろうか。未来だとすると、直前の *ḵoʔal* 形 *wyolaʔt* 「貴女は産むだろう」から TMA が指定される、という池田潤 (*ibid.*) での解釈が成立する。しかし、もう1つの解釈の可能性、つまり「命令」ということになると、池田潤 (*ibid.*) の枠組みでも、伝統的な枠組みでも説明ができない。

### 3.2 分析例2：創世記 32:18-19

#### (7) Gen 32:18b-19a

wayšaw	le+ <sup>?</sup> mor	ki	yiḵgoš+ḵo
wayyikḵoʔol形3.sg.m.	...	前+不定	接
彼は命じた		言う	〜と
			彼は貴方に会うだろう

ʔešow	ʔoŋ+i	wi+šʔe+kō	le+ʔmor
固有名	名sg.m.+人接1.sg.	&+ ʔoŋal形3.sg.m.+人接2.sg.m.	前+不定
エサウ	私の兄	彼は貴方に尋ねる	言う

w+ʔomarto  
 ... &+ʔoŋal形2.sg.m.  
 貴方は言う

彼(ヤコブ)は命じて...言った。「私の兄のエサウが貴方に会って...と尋ねて <sup>(ʔoŋal形)</sup> 言うだろう <sup>(不定形)</sup>、(そうしたら) こう言いなさい <sup>(ʔoŋal形)</sup>。...」

1つ目の ʔoŋal形 wišʔelkō「彼は貴方に尋ねる」は、直前の yiŋŋoškō「彼は貴方に会うだろう」の TMA の影響を受け「彼は貴方に尋ねるだろう」になる。こまでは池田潤 (2004) の枠組みで説明がつく。

問題は2つ目の ʔoŋal形 wʔomarto「貴方は言う」である。ここは、ヤコブが自分の召使いに自分の言うとおりに兄のエサウに向かって発言するように命じる場面である。このことから、ʔoŋal形 wʔomarto は命令の意味を帯び「貴方は言いなさい」となる。この会話文は「彼(ヤコブ)は命じて (wayyiŋŋoŋal形 wayšaw) ...言った。」という地の文に続くものなので、「命じて」というのが TMA 解釈に大きな影響を与えているので文脈上、問題となる ʔoŋal形が命令の意味を帯びるという考え方も出来る。しかし、地の文の「命じて」は wayyiŋŋoŋal形で過去を表すが、ʔoŋal形 wʔomarto「貴方は言う」は明らかに非過去(未来)である。この wayyiŋŋoŋal形の TMA が ʔoŋal形のそれに影響を及ぼしているとしても、部分的にしか、つまり TMA のなかの M、つまりモード(この場合は命令)しか影響を及ぼしていない<sup>11</sup>。地の文の TMA が会話文中の ʔoŋal形に影響を及ぼさないと考えると、この ʔoŋal形が命令の意味を

<sup>11</sup> この事例は、会話文と地の文とでは時間の基準が異なる、ということを表しているという1つの事例になるのかもしれない。



持つということは池田潤 (*ibid.*) からうまく説明をつけることが出来ない。

### 3.3 分析例 3 : ルツ記 2:8-9

(8) Ruth. 2:8

h <sup>a</sup> +lo?	šomaʕat	bitt+i	ʔal-
疑+否定辞	koʕal 形 2.sg.f.	名 sg.f. +人接 1.sg.	副 (禁止命令)
～ではないか	貴女は聞く	私の娘	～してはならない

telki	li+koʕ	b+šoʕe	ʔaħer
yikʕol 形 2.sg.f.	前+不定	前+名 sg.m.	形 sg.m.
貴女は行く	集めるために	畑へ	他の

w+g̃am	lo?	taʕ <sup>a</sup> buri	mi+zze
&+副	否定辞	yikʕol 形 2.sg.f.	前+指代 sg.m.
そして～も	～ない	通り過ぎる	これから

w+ko	tidboħin	ʕim-	naʕ <sup>a</sup> roʕo+y
&+副	yikʕol 形 2.sg.f.	前	名 pl.f. +人接 1.sg.
このように	貴女はついて行く	～とともに	私の女中たち

「お聞きなさい (<sup>koʕal</sup>形)、娘さん。他の畑に行ってはなりません。そしてここから他のところへ行ってはいけません。私の女中たちの後についていなさい。

(9) Ruth. 2:9

ʕenayi+k	ba+šoʕe	ʔašer-	yikʕorun
名 du.f. +人接 2.sg.f.	前+名 sg.m.	関係詞	yikʕol 形 3.pl.m.
貴女の目	野に	～するところの	彼らが刈入れをする

w+ħolakt	ʔaħ <sup>a</sup> re+ħen	h <sup>a</sup> +lo?	šiwwiʕi	ʔeʕ-
&+koʕal 形 2.sg.f.	副+人接 3.sg.f.	疑+否定辞	koʕal 形 1.sg.	前
貴女は行く	彼らの後	～ではないか	私は命じる	～に

ha+nnfōrim 冠+名sg.m. 若者たち	l+ḫilti 前+前 ～しないように	noḡf+ek 不定+人接2.sg.f 貴女を苦しめる	w+ṣomiṭ &+ḵoṭal形2.sg.f. 貴女は喉が渴く	
w+holakt &+ḵoṭal形2.sg.f. 貴女は行く	?el- 前 ～へ	ha+kkelim 冠+名pl.m. その甕	w+ṣoṭit &+ḵoṭal形2.sg.f. 貴女は飲む	me- 前 ～から
?ašer 関係詞 ～するところの	yiš?abun yikṭol形3.pl.m. 彼らが汲んだ	ha+nnfōrim 冠+名sg.m. 若者たち		

彼らが（麦の穂を）集める畑をよく見ておきなさい（名詞文）<sup>12</sup>。そして彼女たちの後について行きなさい（*ḵoṭal*形）。私は召使いたちにあなをを苛めないように命じておきます（*ḵoṭal*形）。喉が渴いたら（*ḵoṭal*形）甕のところへ行って（*ḵoṭal*形）、若者の汲んだ水をお飲みなさい（*ḵoṭal*形）。」

まずは修辞疑問を導く *h<sup>a</sup>lo?* 「～ではないか」についてみてみよう。この *h<sup>a</sup>lo?* は文章のテンス理解に関わり、結果的には *ḵoṭal* 形の TMA 理解に影響し得る。(8), (9) は共に、時間的にはこれから行うことを示しているという点で共通している。つまり (8) はこれから自分が言うことを相手に聞かせるための命令を、そして (9) はこれから自分が人に命じる<sup>13</sup>ということを示しているのである<sup>14</sup>。

<sup>12</sup> 原文は「彼らの働く畑に貴女の目を」。

<sup>13</sup> Bush (1996: 121) が述べているように、この時点ではまだボアズは僕の刈入れ人たちに「命じる」という行為をしていない。ボアズが僕たちに「命じる」行為を行うのは 2:15-16 である。

<sup>14</sup> このことから、*h<sup>a</sup>lo?* はテンスとしては文脈に未来性を与える可能性がある、ということが指摘できそうである。このことについては別稿で論じたい。

それでは *koʔal* 形の問題に戻ろう。(8) は直訳では、「娘さん、貴女は～と聞いたではありませんか」だが *koʔal* 形 *ʂomáʔat* 「聞く」は *h<sup>a</sup>loʔ* の影響を受けて「お聞きなさい」というように命令的な意味合いを帯びる。(9) の *ʕenáyik baššode ʔ<sup>a</sup>ʂer-yiʔsorun* 「彼らが（麦の穂を）集める畑をよく見ておきなさい」は名詞文だが、(8) の *ʔal* 「（禁止命令）～してはならない」と以下に連続する *yikʔol* 形で構成される否定命令文の影響で、この名詞文までもが命令的な意味合いを帯びる。その直後の *koʔal* 形 *wholákt* 「貴女は行く」は、やはり文脈からの影響で命令的な意味を帯び「貴女は行きなさい」となる。このあとの *koʔal* 形 *ʂiwwíti* 「私は命じる」は、修辭疑問を表わす *h<sup>a</sup>loʔ* 「～ではないか」が後続しているので、既に述べたようにテンスとしては未来性を帯び、「命じておきます」となる。問題はそれぞれ「のどが渇く」「行く」を意味する次の連鎖をなす *koʔal* 形 *wšomít* 「貴女は喉が渇く」と *wholákt* 「貴女は行く」である。ここではテンスに関しては両方とも前の文脈から未来性を帯びる、つまり動詞の表す意味内容が実現するのは発話時よりも後の時間である。一方、ムードは前までの文脈からは想定できないものになる。前者は条件を表わし「喉が渇いたら」となる。後者は前者の条件の帰結節のような役割を担うと共に、命令の意味を帯び「甕のところへ行きなさい」となる。最後の *koʔal* 形 *wšotit* 「貴女は飲む」は、直前の命令の意味の影響を受けて「貴女は飲みなさい」となる。これは池田潤 (2004) の枠組みで説明ができる。

### 3.4 分析例 4：ルツ記 3:3-4

#### (10) Ruth 3:2b

hinne-	huʔ	zore	ʔeʔ-	góren
小辞	独人代3.sg.m.	分詞sg.m.	前	名sg.f.
さあ	彼	彼は篩い分ける	～を	麦打ち場

ha+ššʕorim ha+llóylo  
 冠+名pl.f. 冠+名sg.m.  
 大麦の 今夜

さあ、彼は今夜麦打ち場で麦を篩い分けるはずだわ<sup>15</sup>

<sup>15</sup> 原文では「彼は麦打ち場を篩い分けるはずだわ」

## (11) Ruth 3:3

w+rōḥašt	wō+sakt	w+šamt
&+kōṭal形2.sg.f.	&+kōṭal形2.sg.f.	&+kōṭal形2.sg.f.
貴女は身を清める	貴女は香油を塗る	貴女は着る

šimloṭāyi+k <sup>16</sup>	ʔolāyi+k	w+yoradt	ha+ggōren
名pl.f.+人接2.sg.f.	前+人接2.sg.f.	&+kōṭal形2.sg.f.	&+名sg.f.
貴女の上着を	貴女の上	貴女は下る	麦打ち場

ʔal-	tiwwodʔi	lo+ʔiš
副(禁止命令)	yikṭol形(jus) 2.sg.f.	前+名sg.m.
～ならない	貴女は気づかれる	その人に

身を清めて <sup>(kōṭal形)</sup> 香油を塗り <sup>(kōṭal形)</sup>、そして上着を羽織りなさい <sup>(kōṭal形)</sup>。  
 そして麦打ち場に行きなさい <sup>(kōṭal形)</sup>。その人が食事を終えるまで気付か  
 れてはいけませんよ。

## (12) Ruth. 3:4

w+ihi	b+šokb+o	w+yodāfat	ʔet-
&+yikṭol形(jus) 3.sg.m.	前-不定+人接3.sg.m.	&+kōṭal形2.sg.f.	前
～のとき (be動詞相当)	彼が寝る	貴女は知る	～を

ha+mmōqom	ʔāšer	yiškab	-šom
冠+名sg.m.	関係詞	yikṭol形3.sg.m.	副
その場所	～するところの	彼が寝る	そこ

<sup>16</sup> ヘブライ語聖書本文の欄外に記されている「ケレー」の読みに従った。「ケレー」とは、伝承された本文の読みが文法的、あるいは解釈的に不自然なときに、あるいは写本間で相違があるときに、聖書編集者が「これが正しい読みだろう」と判断して記したものを。

u+boʔt &+koʔal形2.sg.f. 貴女は入る	w+g̃illit &+koʔal形2.sg.f. 貴女は捲る	margloʔ+w 名pl.f.+人接3.sg.m 彼の足元	w+šokobt &+koʔal形2.sg.f. 貴女は横たわる
w+huʔ &+人独代3.sg.m. 彼	yaggid yikʔol形3.sg.m. 彼は教える	lo+k 前+人接2.sg.f. 貴女に	?et 前 ～を
?ašer 関係詞 ～するところの	taʔaʔsin yikʔol形2.sg.f. 貴女がする		

彼が寝るときになったら、彼が横たわる場所を見届けなさい<sup>(koʔal形)</sup>。そして(そこに) 入っていきなさい<sup>(koʔal形)</sup>。そして彼の足元をまくりなさい<sup>(koʔal形)</sup>。そしてあなたも(そこに) 横たわりなさい<sup>(koʔal形)</sup>。彼はあなたにあなたがすべきことを教えてくれるでしょう。」

まず (10) を見てみよう。そこにはテンス解釈に関わる副詞的な機能を担う hallóylo「今夜」が来ている。この hallóyloでテンスは未来となる。(11) の冒頭は koʔal 形が3つ連続している。最初の koʔal 形 wroħašt「身を清める」は動作動詞であるが、hallóylo「今夜」の影響で未来のテンスとなる。しかし、ムードに関しては前節からの影響がなく命令となり「身を清めなさい」という意味になる。以降の3つの koʔal 形は池田潤(2004)が主張するように、文脈上 wroħašt の影響を受け TMA と同化する。続く(12)では冒頭に、時を指定する wihi bšokbo「彼が寝るときになったら」が来る。ここでやはりテンスは未来に指定される。wihiは be 動詞に相当し、ここでは未完結相を表わす。これに後続する koʔal 形 wyodáfat「知る」はテンスは未来だが、未完結相ではなく命令である。以後3つ連続する koʔal 形も、上の例と同じく wyodáfat の TMA に同化する。

本節では (11)-(12) で見られる koʔal 形を Joüon (1986: 68-69), Bush (1996:

150) の見解と同じく命令として解釈したが、ここでは全く命令形が全く使われていないのは注目に値すると言ってもよいのではないだろうか。ここでも *koṭal* 形が突然命令的な意味を帯びる例を確認できた。

### 3.5 分析例 5 : ルツ記 3:9

(13) Ruth. 3:9

wattóʔmer	ʔonoki	rut	ʔ <sup>a</sup> moṭé+ko
wayyikṭol形3.sg.f.	独人代1.sg.	固有名	名sg.f.+人接2.sg.m.
彼女は言った	私は	ルツ	貴女の仕え女
u+ṗorašto	knōpé+ko	ʔal-	ʔ <sup>a</sup> moṭ+ko
&+koṭal形2.sg.m.	名sg.f.+人接2.sg.m.	前	名sg.f.+人接2.sg.m.
貴方は覆う	貴方の翼	～の上	貴女の仕え女

彼女は言った。「私は、貴方のはしためのルツです。貴方の御翼を広げて、貴方のはしために覆ってください (*koṭal* 形) …

ここに出る *koṭal* 形 *uṗorašto* 「貴方は覆う」も、相手に対する穏やかな命令(依頼)ということがはっきりと分かる。会話文の導入する「彼女は～と言った」からも命令を暗示する要素は全くない。また、問題にしている *koṭal* 形の直前にも動詞はなく、突然命令的な意味合いを帯びているということが一目瞭然である。

以上の例文では、例文の前後に登場する登場人物について説明をしていないが、(12)までの例で *koṭal* 形が命令的な意味合いを帯びるものは、命令をする者がされる者よりも上の立場の場合であった。しかし、この(13)の例は、会話文の内容から見ればすぐに分かるように、立場が下の者が上の者に向けてする発言である。命令的な意味合いを帯びるのは、立場が上のものが下のものに対して、というケースだけではないということを、この事例が示していると言える。(12)までの例から *koṭal* 形が命令の意味を持ちうる、という印象がもたれるかもしれないが、この(13)の例から *koṭal* 形そのものに命令の

意味があるというのではなく、文脈によってムードが調整されるということが指摘されてよいのではないだろうか。

### 3.6 本節のまとめ

以上で見てきた *koṭal* 形の TMA をリスト化すると次のようになる。

	人称	TMAに関して	注意点
(6)	2	未来	直前の文は現在を示す
	2	未来、命令	直前には命令性なし
(7)	3	未来	直前の動詞のTMAの影響を受ける
	2	未来、命令	直前には命令性なし
(8)	2	未来、命令	修辞疑問文
(9)	2	未来、命令	直前の文が命令性を帯びている
	1	未来	修辞疑問文
	2	未来、条件	突然条件性を帯びる
	2	未来、命令	突然命令性を帯びる
(11)	2	未来、命令	直前は3人称で命令性なし
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
(12)	2	未来、命令	直前は3人称で命令性なし
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
	2	未来、命令	直前の動詞のTMAの影響を受ける
(13)	2	未来、命令 (依頼)	突然命令性を帯びる。 下から上の立場の者への命令 (依頼)

上のリストで網掛けを施した部分は池田潤 (2004) の枠組みで説明可能なものである。つまり *koṭal* 形は直前の TMA の影響で決まる、という例である。しかし、それ以外は直前の TMA とは関係なく、突然未来や命令の意味合い

となるものばかりである。物語の登場人物の発言が表される会話文には、登場人物同士の思い、登場人物の置かれている状況に対する思い、感情などが込められているということは想像に難くない。このようなことが原因となって、会話文には多様なムードが現れる。反対に、聖書ヘブライ語の物語の地の文にはそのようなムードは出てきにくい。結果としてこのような差が地の文と会話文の *koṭal* 形の使用に大きく反映されているといえる。また、基本的には 3 人称物語である聖書中の物語の地の文よりとは異なり、会話文には 1 人称、2 人称、3 人称全てが出現する。様々な人称が現れるということも *koṭal* 形の使用に違いを生じさせる原因となっているといえる。上のリストを見ると分かるように、今回の例では大部分が 2 人称である。人称とムードの関わりを考えると、次のことが言える。命令は基本的には相手、つまり 2 人称に向けてなされるものであるが、そのことは、リストを見ても一目瞭然である。テンスに関しても地の文と会話文の性質の違いが関わってくる。物語の地の文は基本的には過去の出来事を伝える部分である。一方、会話文は登場人物が自分の身の回りに起こったことを相手に伝えるとき（過去）、そして、現在の状況を伝えるとき、またこれから起こることを伝えるとき（未来）、というように地の文よりも様々なテンスが出てくる可能性がある。このような差も、*koṭal* 形の使用に大きく関わってくる。池田潤 (*ibid.*) で TMA の影響が後続する *koṭal* 形につきつぎに影響を及ぼしていった例がみられたのは、3 人称と過去が基調（人称とテンスの乏しさ）で、ムードに乏しい地の文の性格ゆえの現象だったのかもしれない。

最後にこのリスト全般を今一度みてみよう。命令の意味合いを帯びるときには 2 人称であることは言うまでもないが、テンスに注目してみると全て未来になっている。このことから、*koṭal* 形が「会話文中・2 人称・未来」という条件下に現れると、命令や依頼といった意味合いが出てくる、ということが指摘されてもよいのではないだろうか。

以上のことから、会話文と地の文とで *koṭal* 形の用法が異なるということも提示することが出来たのではないだろうか。



#### 4. 結論

本稿では、池田潤 (2004) で提案された *koʔal* 形の研究を基盤として会話文の *koʔal* 形を分析した。その結果、地の文を分析対象とした池田潤 (*ibid.*) の枠組みでは説明できない例もあることが明らかになった。

本稿での分析結果を踏まえつつ、池田潤 (*ibid.*) の枠組みに若干の修正を加えることによって、会話文の *koʔal* 形を分析する際の枠組みとして、次のような提案をしたい。

- 1) 地の文と同じく TMA に関して無標な *koʔal* 形も見られる
- 2) 会話文における聖書ヘブライ語の *koʔal* 形のデフォルト値は人称との関連性があり、地の文のそれとは異なる例が多く見られる。2人称で非過去のときは命令のムードを帯びることが多い

以上で見た結果は、物語そのものの性質とも関わっている可能性が高いかもしれない。したがって、今後はより多くの物語で今回提示した結論を検証してみたいと思う。

#### 【参考文献】

- 阿部節子 (1985) 「ヘブライ語動詞における perfect / imperfect の本質」『ニダバ』14: 15-20.
- Bush, F. (1996) *Ruth, Esther*. Word Biblical Commentary 9. Dallas, Texas: Word Books.
- Hopper, P. J. (1979) 'Aspect and Foregrounding in Discourse.' In: Talmy Givón (ed.) *Discourse and Syntax*. 213-41. New York: Academic Press.
- 池田晶 (2002) 「ルツ記研究：その成立時期をめぐる言語学的研究」広島大学大学院社会科学部研究科修士論文.
- 池田晶 (2003) 「旧約聖書ルツ記の成立時期と文学的潤色について」『一般言語学論叢』4.5: 59-80.
- 池田潤 (1985) 『古典ヘブル語物語談話における時制転換について：Waw-Convulsive 現象の再検討』筑波大学大学院文芸・言語研究科修士論文.

- 池田潤 (1986) 「《Waw-Conversive 現象》理解のための作業仮説：談話文法の視点から」『言語学論叢』5: 44-57. 筑波大学一般・応用言語学研究室.
- 池田潤 (1992) 「アマルナ語：紀元前2千年期のピジン」『オリエント』35: 1-21.
- 池田潤 (2000a) 「聖書ヘブライ語における言語変種：概観とケーススタディ」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』20: 179-204.
- 池田潤 (2000b) 「聖書ヘブライ語に見られる地域差について」『文藝言語研究・言語篇』38: 1-15.
- 池田潤 (2002) 「ユダとイスラエル：列王記に見る言葉のちがひ」『聖書学論集』34: 1-21.
- Ikeda, J. (2003) 'The Biblical Hebrew Suffix Conjugation in the Light of Canaanite-Akkadian.' *Annual of the Japanese Biblical Institute* 29: 31-45.
- 池田潤 (2004) 「アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形」『言語研究』126: 69-92.
- 池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-106.
- Joüon, P. (1986) *Ruth: Commentaire Philologique et Exégétique*. 2nd edition. Roma: Biblical Institute Press.
- Joüon, P. (1996) *A Grammar of Biblical Hebrew*. Translated by T. Muraoka. Roma: Biblical Institute Press.
- Kutscher, E. Y. (1982) *A History of the Hebrew Language*. Jerusalem: Magnes Press.
- Rudolph, W. (1962) *Das Buch Ruth, Das Hohe Lied, Die Klagelieder*. Gütersloh: G. Mohn.
- Sasson, J.M. (1989) *Ruth: A New Translation with a Philological Commentary and a Formalist-Folklorist Interpretation*. 2nd edition. Worcester: JSOT Press.

## The Biblical Hebrew *ִכְּוֹל* in the Dialogue

IKEDA Akira

In this paper I focus on the Biblical Hebrew (BH) *ִכְּוֹל* in the dialogue (D) and demonstrate that the *ִכְּוֹל* forms behave differently from those in the narrative (N).

J. Ikeda (2003, 2004) focused on the *ִכְּוֹל* forms in the N and proposed that “the BH SC (Suffix Conjugation = *ִכְּוֹל*) in narrative texts is unmarked for TMA. Its TMA are determined by the context if possible. If they are not specified by the context, the SC takes the default value according to the semantic subcategories of the verb.” But his proposal is not sufficient when we analyze *ִכְּוֹל* forms in the D. By adding some revisions to his proposal, I suggest a new framework as follows:

- 1) Some *ִכְּוֹל* forms in D are unmarked for TMA as in the N.
- 2) The default value of the *ִכְּוֹל* forms in the D is related to the person and is different from those in the N. The *ִכְּוֹל* forms in the second person in a non-past context often function like the imperative.